森林計画学会誌の創刊にあたって*

会長 南雲 秀次郎**

昨年4月、林業統計研究会が森林計画学会に名称変更されたのに伴いここに森林計画学会誌が創刊されることになりました。会員諸氏とともに時代の要請に応えうる学会誌の誕生を喜びたいと思います。

私は15号まで続いた林業統計研究会誌の誌面を飾った多くの論文の中でも今後ますます発展が期待されるものの一つが林木の成長モデルの研究であったと考えます。ここでは様々の視点から成長モデルがとりあげられ、会員相互の論議の中から多くのアイデアが生まれました。それらの成果が総合化されたものが現在のシステム収穫表であります。ここにおいてはじめて研究と実践が結びつきました。われわれはこのシステム収穫表を利用して人工林施業の方法を検討することができますし、この手法で天然林施業や複層林施業を実施する上での指針をうることができるといふ展望も開かれました。このことは経験を主体とした施業技術から科学的に裏づけられた施業技術への発展を意味するもので林業技術の発展上エポックメイキングなことだと考えます。この研究がさらに発展するならばシステム収穫表は林学で数少ない先端技術となることが期待できます。

社会が複雑化し、森林に対する世の期待も多様になりつつある現在、新しい学会誌に掲載される論文の内容もまた多様になるものと予想されます。この中で私は森林計画策定システムの研究が、成長モデルが辿ったと同じ発展をめざして紙面を賑わすことを望んでいます。

今後コンピュータの能力はますます高度化することが予想されます。こうした中でこのコンピュータを利用した総合化された森林計画策定技術の研究が、ますます重要な課題になってくるものと考えます。ここで時代がどのように変わろうとも、森林をその発揮されるべき機能群に応じて線引きし、それぞれ共通な施業目的を課した森林を単位として計画を策定してゆくという従来からの方法論には大きな変更はありえないと思います。問題は同一目的とはいえ主副様々な機能の発揮が期待される森林に対していかにして具体的計画をたてるかという計画手法にあります。この策定手法は部分的な最適化を含んだシステムシミュレーションが主流になるものと思われます。この場合、多くの専門家の経験や判断をコンピュータにとり込んだ意思決定支援のためのエキスパートシステムを利用することは極めて有望な手法であろうと思います。森林計画という複雑な対象には種々の領域で熟達した専門家の助けをかりることが適切だからであります。

* Hidejiro NAGUMO :On the occasion of the start of the Japanese Journal of Forest Planning

** 東京大学農学部 Fac.of Agric.,Univ.of Tokyo, Tokyo 113

Jpn. J. For. Plann. 16 '91

現在この分野では様々な計画モデル、GIS、データベースなどが研究されています。今後の研究の目標は一つの大きな領域としてシステム収穫表も加えて、これらの諸研究を総合化し、一つの計画システムの体系を構築することにあります。こうした体系化の終局的姿として上述のエキスパートシステムがあると考えます。

学会誌は学会の顔ともいうべきものです。対外的には学会活動の成果を伝える手段であり、対内的には会員が論文発表を通じて研究活動を高めてゆく手段であります。私は理論と実践との融合というこれまでの伝統が守られつつ、会員諸氏の努力によってこの学会誌がわれわれの学会活動の発展に大きく役立つことを心から願っております。